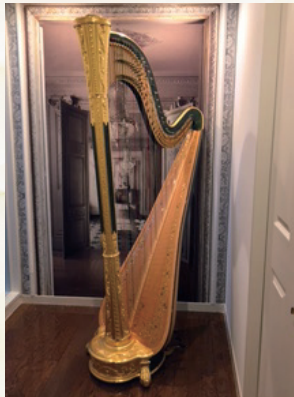


My Harp, My Life 私の楽器

『ミネルヴァ・グリーン』

縁は異なるもの。今まで様々なハープを弾いてきて、やっと「これだ」という楽器に辿りついたのが、サルヴィ・ミネルヴァだった。これから一生付き合っていく楽器と心に期していたのだ



が、ある時メカニズムの部分が壊れてしまい、思いもよらず修理か買い替えかを迫られたのが、およそ10年前。プロ演奏家として、ハープ講師として、これからバリバリやっていく時期なのにと、ほんとに困った佐藤さんが出会ったのが、このミネルヴァ・グリーンだった。今でこそグリーン・カラーは、サルヴィのアップパー・クラスによく使用されるお馴染みの色合いだが、当時はまだ珍しく、マホガニーやナチュラルの仕上げが主流な中で2台ほど入荷していて、どちらかといえば好奇心に晒されていたという。だがよく観ると、「私を連れて帰って」と訴えるような感情に誘われた。

試奏してみると仕上がりも上々で、再度これからの伴侶に巡り合ったと喜んでいて。「ところが、そこからが大変だった」と、佐藤さんは述懐する。楚々と澄ましていたグリーンは、佐藤さん曰く、羊の皮を被った狼で、“思春期を迎えた問題児”だった。ミネルヴァやイリスのようなコンサート用で使われる上位機種は、音に必要以上の修飾がない。最初はどうしても、手探りの状態で音に対峙せざるをえない。だが弾き込むことで、楽器の特性や個性が演奏者の好みにフィットしてゆく、いわば高級万年筆のように「書き込むうちに、自分好みの書き心地に育ってゆく」感覚に似ている。今では「すっかり可愛い音を出すようになった」グリーンは、プロの奏者／講師としての佐藤さんにとって不可分な相棒になっている。



佐藤 厚子

EVENT SQUARE

イベントスクエア

- 10/7 ティコムーン 東京・六本木アークヒルズ カラヤン広場
- 10/21 古佐小基史 ほか まつやまハープフェスティバル 南海放送本町会館テラスホール
- 11/9 有馬律子 東京・パルテノン多摩 小ホール
- 11/16 吉野直子 他 東京文化会館
- 11/23 中村愛、池山由香 他 「2つの竖琴」オランダアモーニングコンサート 東京オペラシティ3階・近江楽堂
- 11/27 ソフィア・キブルスカヤ ハープ・リサイタル 東京・日経ホール
- 11/30 マリー・ピエール・ラングラメ(ハープ)、エマニュエル・パユ(フルート) & リーズ・ベルト(ヴィオラ) 東京・王子ホール

The Last Chorus

●スタジオ・クローチェがオープン

10月6日10:00～銀座十字屋が東京・吉祥寺に、レンタルスタジオ「銀座十字屋スタジオ・クローチェ」をオープンする。5部屋全てにハープとピアノが設置され、クラシック楽器であれば利用可。1時間1620円(税込)とリーズナブルに使用できる。☎0422-29-7586

●全国展示会開催情報

銀座十字屋があなたの街へ。ハープ、楽譜などを携えて、銀座十字屋が各地で展示会を開催致します。10/28 下関、11/3 大阪、11/4 名古屋を予定しております。会場・開催時間等につきましては、銀座十字屋ホームページにて随時お知らせ致します。

●GTF会員講師募集中

銀座十字屋では、ハープ教室運営やハープ講師を各地でされている皆様が、情報交換やお得な各種サポートを受けられるコミュニティ・サービス「GTF(銀座十字屋ティーチャーズ・フォーラム)」にて講師募集中です。harplife@ginzajujiya.com

A MAGAZINE FOR THE HARP PLAYER

HARP LIFE

10

2018

ハープと皆様を繋げる
オンリー・ハープなフリーペーパー



SECOND ISSUE

Vol.2

tico moon (ティコムーン)

新たな試みと 変わらないもの



ハープとギターという、一風変わった編成のデュオながら、多くのファンに支持されているティコムーン。楽器のアコースティックな響きと繊細なアンサンブルで知られるデュオだ。ある日、ハープを担当する吉野友加が、自身が講師も務めている銀座十字屋にデルタのレンタルを打診してきたことが、インタビューのきっかけとなった。当然スタッフたちは、当惑する。「吉野さんからデルタの依頼があったのですが」「え?何かの間違いなのでは?」…物静かで小柄な吉野が、あのデルタをストラップで肩からかけて、エレクトリックハープを弾く?固定概念とは恐ろしいもので、スタッフはデルタ&吉野友加という絵図を勝手に上記のように想像してしまったわけである。しかし、もちろんそこにはとある背景があったのである。

ある時ティコムーンは、ユニットごとバンドヘゲストで呼ばれた。ギター担当の影山敏彦が語るには、アコースティックな二人の音は、ドラムやその他の楽器に混じるといつも掻き消されると言う。ハープの音がかろうじてグリッサンドの音だけ聞こえたことも、今まではあった。まさにPA(音響係)泣かせで、グースネック・タイプのピン・マイクを楽器にクリップする従来の方法だと、ハープの弦がハウリングをおこし共鳴してまったり、他の楽器や演奏者とのバランス調整が難儀だったり、ステージで演奏する側にも音が下から上がってくるような反響を覚えたり、課題が山積だった。そこでエレクトリックで、ハンディなデルタの存在に着目したという流れだったようだ。最近、ギターに関しては、アコースティックギターにマイクが付いたいわゆる`エレアコ`が定着、逆にエレキギターにアコースティックな響きを持たせるタイプも出てきた。ハープにもそんな時代性が反映されるのは、当然の帰着なのかもしれない。余録として、デルタにはミュート機能が付いて、演奏しない時には弦を押えてハウリングに気を配る必要もなければ、プラグインしているのでチューニングも楽になる。今回は、縦琴のようにスタンドでデルタを立てて使用したが、「若干トップの重さから来るバランスが気にはなるものの、持ち運びも便利だし、機内・車中に持ち込み可能っていうのも素晴らしい」と言う。切実な悩みがプラスに転じた二人の証言は、目から鱗(うろこ)だった。

意外性あるデルタの使用ではあったが、思えばこのデュオの成り立ちも発想の転換から生まれたともいえる経緯があった。ハープとギターの音域が被るということは百も承知。むしろ音楽性が合う二人が共に紡げる音楽を追求したい、そんな着想から始まったのである。だからギターのデュオのように聞こえたり、ひとつの弦楽器で弾いているように聞こえたりする。無論、葛藤だってある。けれど、信念は曲げないという。つまり、デビュー以来、当初から互いの楽器の沸点ギリギリまで突き詰めて、ここでしか交わらないという点で音楽を成立させているのがティコムーンといえるのだ。だから、妙にブレンドする部分と、敢えてありのままの部分の混在するところに、このデュオの魅力がある。それが活きるのがオリジナル曲であり、長いキャリアの割にカバー曲が少ないのも、二人は「難しいから」と謙遜するが、実は二人が追求する価値との意味合いを天秤にかけた上でのこと。舞台裏では、そんな真摯な音楽的苦闘がある。その熱こそが、耳心地はいいがBGMでは終わらない音楽を形成してゆくのだろう。新しい挑戦といえば、最近は吉野が歌を入れたり、歌手とのコラボレーションを試みたり、ヴォイスへの関心を示している。さらに今回デルタも手にしてみた。楽譜を多く作り出す作業にも手を染めている。昨年のベスト盤のリリースで一段落ついて、新たな岐路に立った二人だが、音楽の絆はこれからも変わらないし、たぶん二人は今後「音楽性の熟成」に向け、対話を深く掘り下げてゆくのだろう。

《ハープ&ギターコンサートのお知らせ》
10月7日 東京・六本木アークヒルズ
カラヤン広場にて、15:00-15:30に開催。

吉野友加による
デルタ試奏風景は、
こちらでチェック!





最近、ケルティックとかケルト音楽という言葉を目にします。これ、西ヨーロッパのケルト人の民族音楽から発展して、継承されていった幅広い音楽のジャンルを指すのです。特に人気の主軸となっているのがアイリッシュ音楽で、その牧歌的な響きや安らぎを感じる詞やシンプルな旋律で、今も長い伝統を守っています。今日の再隆盛のきっかけは、NYで大ヒットしたミュージカル「リバーダンス」であったと云われています。どこか郷愁を誘うメロディやシンプルでノリの良い調べは、各国のフォークロアとも結び付き、アメリカではカントリー、ブルーグラスの復活にも大きな影響や恩恵を与えています。古くは、アイルランドで「国民的作曲家」と称されるターロック・オキャロランが200に及ぶ曲を残し、最後の吟遊詩人として国内を巡りました。現代では、ザ・チーフタンズ、エンヤ、ケルティック・ウーマンら世界的大ヒットを飛ばすアーティストを多く輩出しています。そんなケルト音楽の魅力とは何でしょう。

時に懐かしささえ覚えるこの音楽の魅力は、日本にも多くの類似性があることと、けっして無縁ではありません。ケルトの伝統的な音階は5音階で、日本でもFとBの音を抜いた音階（ドレミソ）をよく用います。基準になる音はDです。Dから白鍵だけ辿るドリア旋法が主なのです。これは、ケルト音楽のみならず、日本でも踊りを含む民謡の類いをご存知のように、シンプルな三拍子ものが多く、基準になるビートが短ければ、当然ノリも良くなります。加えて、全てがデジタル化してゆく世相の振り戻しとして、素朴なケルト音楽に深い安らぎを見出したのでしょう。ケルティックに感じる懐かしさの正体は、どうやらそんなところに秘密がありそうです。



RECOMMEND

おすすめレバーハープ



UNA



DONEGAL



TITAN

盲目のオキャロランが、アイリッシュ音楽を伝道する際に使った楽器、それがラップハープです。その他の楽器は、ティンホイッスル、フルート、ヴァイオリン、マンドリン、バグパイプ、後にアコーディオンなども加わりますが、共通項に気付きませんか？そう、全てハンディで持ち運べる楽器ばかりだったということです。これは、当時ヨーロッパが宮廷音楽花盛りで、ピアノ、チェンバロ、パイプオルガンなど、据え置き型の楽器がほとんど大型化してゆくのは好対照でした。ケルト音楽は、と

りもおさず大衆のためにあり、興に乗ればダンスなどを楽しみ、吟遊詩人たちが持ち運びやすい楽器である必要があったのだらうという想像が成り立ちます。

アイリッシュ音楽の主要楽器であったハープは、前述のようにラップハープが連綿と奏でて来たスタイルが、さらに半音変化を容易にさせるデバイスであるレバーを付けたことで、持ち運べる限界ギリギリまで煮詰めた形として、現在のレバーハープ（アイリッシュハープ）

に収斂（しゅうれん）させたと思われまふ。ここで、そんなアイリッシュ音楽を体現できるサルヴィハープの機種をいくつかご紹介しましょう。昨年夏に発売されたウーナは、すでに人気のレバーハープで、軽量ながら豊かなトーンと深い低音が魅力。あのサーシャ・ボルダチョフをして「レバーハープは、普段使わないけど、もし持つならばウーナを選ぶ！」と言わしめた逸品です。もうひとつは、ドネガルです。音の温かさを追求したモデルです。ドネガルはふくよかな響き、粒立ちの

よいクリアな音が、実にバランスよく繰り出されます。これらはプロ・モデルですが、サルヴィではロングセラーのタイタンも用意されています。ギグナーからプロまで長く愛用されてきたというのは、安定と堅調の証しです。ケルティック音楽は誰もが手軽に始められて、楽器そのものもポータブルなのが最大の魅力です。それらをまさに体現・演奏できるのが、サルヴィ・レバーハープだと言えるでしょう。

魅惑のレバーハープの世界

ケルト音楽とフォークロア《前篇》

サーシャ・ボルダチョフによるUNAの試奏は、こちらでチェック！





Harp Caravan

ハープ・キャラバン第2回

新井 薫

各地のハープが輝いている街／ハーピストたちを訪問するハープ・キャラバン第2回目は、新井薫さんである。エレクトリック・ハープの現況を知るのに、まさにうってつけの奏者。井上久美子門下の正統派のプロである。帰国子女として、10代前半に帰国してからハープを習い始め、レバーハープも弾くが、実は今もペダルハープが最も慣れており、条件が許される限り、サルヴィ・エコーを演奏のお供に連れてゆくという。どのような過程でエレクトリック・ハープを手にしたのか。

「タイミングもあったのですよ。結婚前に、恐らくいまのようなハープを手にするか真剣に考えないと、子供ができたりしたら、たぶん一生考えることはできないだろうと思ったのです。その際に、最も条件にあてはまっていたのが、サルヴィ・エコーでした」。

プロとして仕事を始めると、クラシックのみならず、様々なシチュエーションや様々な音楽の演奏を要求されるようになった。結婚式で長く即興的な演奏を要求されたり、他の楽器との共演を求められたり…。それは新井さんにとっては、シーンの状況に順応を迫られる、ハープ奏者としていわば試練であったはずだが、むしろ`楽しむ、方向へ頭を切り替えた。新井さんが帰国子女であったことから、英語圏のミュージシャンと交流が増えた。そこには、今まで習ってきた常識を覆される治外法権の人々が棲んでいた。楽譜が



読めないとか、最小限の制約の中で最大限の音楽的自由を謳歌するような、そんな仲間と演奏するのに、音が増幅するハープ、つまりエレクトリックとの邂逅(かいこう)はむしろ必然となった。ステージ上での音響バランス、チューニングの利便さ、慣れたグランドハープであることから、エコーを選択したわけだ。いまはさらに欲求が進化／深化して、「レンジが広すぎるグランドから、いっそダフネ40くらいの大きさでシングル・アクションのエレクトリックがあればいいですね」という意見も持っている。

実践で培ったゆえの提言だろう。エレクトリック・ハープをかなり初期から手にした、新井さんの先駆者としての挑戦はまだまだ続く。

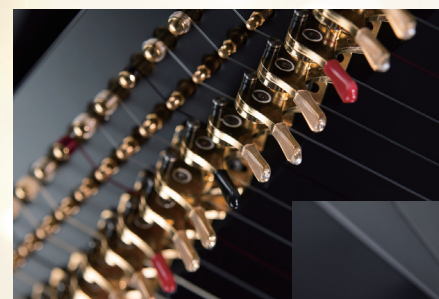


▲子供たちをステージにあげてしまうプレミアム・コンサートへ精力的に参加。目前で演奏して、未来のハープ奏者たちの憧れを誘う。

季節の おすすめハープ

Vol.2

季節ごとに、毎号1台ずつ
銀座十字屋がおすすめする、
素敵なサルヴィハープ。
今回はエレクトリックハープの「デルタ」です。



10月19-21日、東京ビッグサイト西1・2ホールで開催される「2018楽器フェア」の銀座十字屋ブースで、デルタが展示されます。ぜひ、体感してみてください。



使用方によって
どこまでも広がる
可能性。

マット・ブラックの三角シェイプ。シャープなボディは29の弦を有し、ブリッジを通じてエレクトリックならではの、ピッチ・ベンド、スライドといったテクニックも思いのまま。音を増幅させるピックアップは、ブリッジ部分についており、クリアな高音域からピュアな低音域まで実に鮮やかに再現します。トライポッド・スタンドを使えば、竖琴のように演奏も出来、ストラップで肩から下げてプレイすれば、ライブ映えることは確実です。また、プラグインの特長を活かし、エレクトリックギターのようにエフェクターを使ったり、ミュート機能でハウリングを抑えたり、チューニングも楽々。レコーディングやPAにも対応するので、簡単なデモテープの制作やスタジオワークでも効力を発揮します。世界では、すでにレミー・ヴァン＝ケステレンやサーシャ・ボルダチョフといった次代を担うハーピストがライブやレコーディングで使用していて、日本でもSanaeや本号記事でもフィーチャーしている吉野友加といったプロ・ミュージシャンたちが手にし始めています。一見、ハードルが高そうにみえて、実は手にして演奏してみれば、その表現力や利便性、そして使い方によってどこまでも広がる可能性の虜になってしまうのが、この楽器の魅力なのです。百聞は一見にしかず。ぜひ、一度試奏してみるか、以下のビデオをご覧になって疑似体験してみてくださいね。

サーシャ・ライブで
デルタの実力を
チェック!



Delta

デルタ